

第四回配本 十二支考 II

第二卷 配本十月末予定

驚いた事

岩村 忍

南方先生の博学宏識は天下周知の事実で、いまさら驚いたなどと言うと噴かれるかも知れない。だから私は先生の多読と記憶力の絶倫には、いまあらためて全集第一巻を読んでも別に驚かなかつた。むしろ私は、先生の読書の範囲が、余りに広る過ぎ、何か難然たる感じを受けな

いに驚かされた。南方先生のロンドン滞在中、或は「十二支考」執筆当時はマルコ・ポーロのテキストの問題は未だ余り学者の関心を引かなかつたもので、専門の東洋学者や地理学者でも皆ユーロ本で満足していたものである。ユーロ以前にラムジオ版によつたマースデンの英訳なども出ていたが、当時の学者は殆どみなユーロ版で済ませていたもので、ラムジオ版の眞価が認識されたのは、こゝ十数年来のことと過ぎない。普通の学者であれば、当時マルコ・ポーロを調べるためにわざわざラムジオを讀むなど言うことをするわけはない。第一にラムジオの「記行彙函」は一五五九年にヴェネチヤで出版されたなかなかの稀覯本である。第二にその文章はそ

ラムジオ版は、当時存在していたが、現在は失われてしまつた数種のマルコ・ポーロのテキストを総合したもので、その中には極めて貴重な佚文が多く含まれている。南方先生が引用されているのは、そういう佚文の一節でユーロ版などには見えないものである。こゝで私は、一事を調べるにも徹底しないでは已まぬ先生

の精神をまざまざと見せつけられる気がした。イージー・ゴイングな日本人の中に南方先生のような人が出られたことは「展望」の七月号で柳田国男氏が指摘されているように「日本民族の可能性、つまりポシビリテイ」を実現して示してくれたと言ふ意味で、我々後進に対してこの上ない鼓舞激励を与えるものであるに違いない。南方先生がヨーロッパに生れられたら、恐らくデイドロやスペンサーのような人になつていたらと思ふ。私は南方先生を容れ得なかつた日本の社会に憤りを感じ、そしてお気の毒でならないのである。

柳田先生が如何にこの「来書」を大切にされているかは、この淨写の書冊と原本である書簡そのものとは決して同じ所に置かないような心遣ひまでせられてゐる事でも知り得るであらう。今回の出版に當つて、当事者はこの事に触れて柳田先生の学問への深い関心に心打たれるものがあつたのである。この原本と写しとを別に置くことは本書出版事務が遂行されている数カ月間の間も嚴重に行われて来たのであつた。

第三回配本(第十卷) 書簡(三) 解説 書簡篇の第三(第十卷)はすべて柳田国男先生宛の書簡を収録している。柳田先生宛の書簡は明治四十四年から始つてゐるが、柳田先生はこれらの書簡を極めて大切に扱ひ、受信後逐次これを淨写に整理してゆかれた。「南方来書」十冊はこのようにして成り柳田先生の藏書中に秘藏されて来たものである。

本十巻の内容は頗る多岐に渡つてゐるが、中でも重要な項目は「神跡考」の摘訳であり、長文なものである。これは初め英文で書かれたものであつて、神社合祀に就いての意見書を柳田先生が「南方二書」と題してパンフレットにして出版(木全集第八巻収録)されたのに対して、その喜びを伝える意味で自身翻譯せられたものであつた。また「遠野物語」「石神問答」(共に柳田先生の調期的な著書)についての意見も今日は貴重な文献たるを失わぬであらう。「燕石考」は遂に未刊の大著となつて残されたが、本書にはその概要が伝えられてをり、その他今日尙光輝を失わぬ識見が随所に見出される。明治四十四年と言へば已に半世紀に近い年月を隔ててをり、その間に日本の民俗学は柳田先生の主導に依つて巨大な発展を来した。然も「南方来書」の価値は尙少しも失われずにゐることは、この巨人の識見の正鵠なものであつたことを伝えていると言つてよいであらう。

第四回配本十二支考完結篇は十月末、第五回配本土宜師宛書簡篇は十一月、第六回配本論考一は十二月中旬迄に発行の予定で進行して居ります。※印に就ての疑問お問合せが沢山来ます。第一回配本巻頭の凡例を御覧下さい。此の凡例は近い中もう一度載せま